

# 気管支擦過細胞診においてLBCが有用であった肺吸虫症の1例

西元 しのぶ<sup>1)</sup> 渡邊 浩子<sup>1)</sup> 矢野 りか<sup>2)</sup> 寺田 一弥<sup>2)</sup> 吉岡 誠<sup>3)</sup>

宮崎市郡医師会臨床検査センター<sup>1)</sup> 宮崎市郡医師会病院<sup>2)</sup> 宮崎市立田野病院<sup>3)</sup>

## 【はじめに】

今回我々は、気管支擦過 LBC (液状化検体細胞診) が有用であったと思われる肺吸虫症の1例を経験した。その症例を、当検査センターの LBC 標本作製法を含め報告する。

## 【症例】

70 歳男性。高血圧にて通院中、住民検診の胸部レントゲン写真で限局性浸潤影を認め受診。CT では空洞形成の腫瘤を認め、CEA 6.1 と軽度上昇しており肺癌が疑われた。気管支鏡検査が行われ、当検査センターに気管支擦過および気管支洗浄液の細胞診が依頼された。

## 【検体】

気管支擦過直接塗抹標本 2 枚、塗抹後のブラシ先端固定液、気管支洗浄液が提出された。

## 【方法】

ブラシ先端固定液から LBC 標本 1 枚、気管支洗浄液から直接塗抹標本 2 枚と LBC 標本 1 枚を作製した。提出された気管支擦過直接塗抹標本を含め、計 6 枚すべてにパニニコロウ染色を行った。

## 【細胞診所見】

悪性細胞は認められなかったが、気管支擦過 LBC 標本のみ黄金色で厚い卵殻を持つ虫卵 1 個が検出された。その後、他施設にて血清検査が行われウエステルマン肺吸虫症の診断を得た。

## 【考察】

直接塗抹標本は、標本作製時の不手際による乾燥や塗抹細胞少数により検体不適性となる事が少なくない。LBC はこのような事態を回避するのに有用とされている。さらに、採取器具を固定液中で洗浄し細胞を回収することで、採取されたより多くの細胞を標本に反映できる。当検査センターでも、細胞採取に使用したブラシの先端や穿刺針の洗浄液を LBC 検体として利用しており、そのことが今回の虫卵検出に繋がったと思われる。

連絡先 0985-52-5115